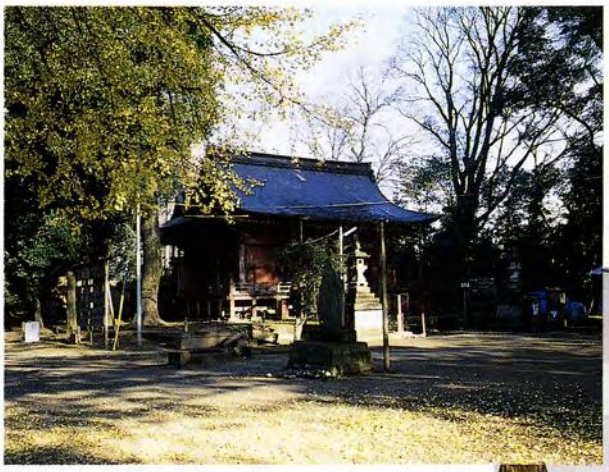
川越市立博物館

博物館だより

第10号

第５回 特別展「三芳野神社の社宝」



▲三芳野神社遠景

特別展展示風景▼

平成５年10月５日㈫から11月21日㈰まで当館特別展示室において第５回特別展「三芳野神社の社宝」を開催いたしました。

三芳野神社は、平安初期の創建と伝えられ、長禄元年(1457)、河越城が築城されると、城内の鎮守として歴代城主をはじめ多くの人々の篤い崇敬を受けるようになりました。

現存する社殿は、川越城主酒井忠勝が寛永元年(1624)に幕命により造営したもので、明暦２年(1656)、弘化４年(1847)、大正２年(1922)の大改修を経て、昭和30年には江戸初期の代表的な権現造の社殿として埼玉県の文化財に指定されています。しかしながら、近年社殿の損傷が著しく、文化財としての保存が心配されましたが、平成元年度より三ヵ年にわたる大規模な修復が行われ、昔日の威容を取り戻しました。

今回の特別展では、三芳野神社に伝えられた数多くの社宝のなかから国・県指定文化財をはじめ未公開資料を含め57点を紹介いたしました。本丸御殿や博物館に近く、身近な存在として広く親しまれて来た三芳野神社ではありますが、このような形で一堂に会して社宝を公開するのは初めてということもあり、会期には多くの来館者をお迎えして好評のうちに展覧会を終えることが出来ました。

最後に、本展の開催にあたり種々ご協力を賜りました三芳野神社関係者の皆様に心より御礼申しあげます。

〝三芳野神社の謎〟のはなし

いちはやく春の訪れを伝えてくれる梅の花が境内に芳香を漂わせ、やがて桜の花が咲き乱れるようになると、それに呼応するかのように境内の木々はいっせいに青葉若葉を梢に広げて、文字通りみよし野の名にし負うお城の天神さまの風情となります。

つつじの花も終り、青梅の実る頃をすぎると、蟬時雨の夏。虫の音すだく秋も深まれば、欅、小楢、椋などの葉はしだいに色を変え、同時に夥しい数の椎や樫の実が地上に落下しだします。雑木たちの落葉がすっかり終ると、こんどは真打ちの登場とばかり参道の両脇に聳える大銀杏のまばゆいばかりの見事な黄葉です。いちめんにひろがる鬱金(うこん)の絨緞を踏みしめ参道をすすめば、何処からか子供たちのとおりゃんせの唄が時空をこえて聴こえてくるような気さえします。青空晴れわたるこの美しいいく日かがすぎると、境内はやすらかな休息の時をむかえ、新しい春の訪いを待つことになります。

あたりには野鳥も多く、一年をとおして雀、薙子鳩(きじばと)、烏、鶺鴒(せきれい)、椋鳥(むくどり)、鵯(ひよどり)、四十雀(しじゅうから)、川原鶸(かわらひわ)、などが憩います。ことに春先には、どこの山からか鶯がやって来て可愛い声で囀(さえず)ります。

街の雑踏を離れてここまで来ると、まるで別天地。朝夕犬を連れて散歩の途中に神前に手を合わせる人があり、児童公園では、子供たちの元気に遊ぶ姿。グループで川越を訪れた人たちが昼食をひろげて歓談したり、愛を語らうカップルがいたり、遠足の一団が騒がしく通り抜けたり。いつも人は絶えないけれど、決して賑わうことはなく、人々は足早に過ぎて行く。ここでは、ただ季節だけが手順を違(たが)うことなく廻って来ます。そして、こうした四季の移ろいのなかに、三芳野神社はいつもひっそりと、しかし厳かに鎮座まします。

江戸から明治、大正、昭和、平成と世の中はめまぐるしく変転を重ねて来たのに、この一郭だけはまるで無関係のようにゆっくりとした時の流れに身を委ねて来たように感ぜられます。川越のまちに残された唯一の閑寂な異空間。ここにこうして三芳野神社が在りつづけたこと自体、私には何故か不思議な気がしてならないのです。

ところで、今日は三芳野神社の社殿にまつわる謎の話をすることにしましょう。

三芳野神社の歴史をたどることは、縁起や残された記録によってある程度可能ですが、実は不明の点が多いのも事実です。そして、そのことはすこし前までの社殿の荒廃と密接に関係があるように思えるのです。原因のひとつは、明治維新後の別当高松院の廃絶に伴い管理主体を失い、社宝はともかく、記録類の多くが散佚してしまったこと。また、氏子が少なく（もとは氏子がなく、明治以降今の郭町１・２丁目、三久保町が氏子となった。)、歴史的にも神社と氏子の関係が稀薄で、かつ神社が民家と離れているため、管理上多少不備があった点が指摘されます。もちろん、社殿が文化財に指定され、その価値が正しく認識されるようになってからは、地元の皆さんの不断の努力で管理もゆき届き、念願の平成の大修理の完成をみたのは特筆に値するものです。しかし、ここに至る100年以上のあいだには、確かに永く不遇の時代があったのです。

さて、いよいよ本題です。三芳野神社の社宝に「三芳野天神縁起(県指定文化財)」があるのは広く知られています。由緒ある神社に相応しく贅を凝らした仕立で、美術的にもとても優れた絵巻です。実は、この絵巻をつぶさに観察していくと、とても面白い事実に気づかされるのです。それは、普通考えにくいことですが、く現存の社殿と絵巻に描かれたそれとは、明らか

に別物〉ということです。較べて見れば一目瞭然のこの事実の意味するもの、これこそ三芳野神社に秘められた最大の、しかも手強い謎にほかなりません。

三芳野神社の宮司である山田勝利先生は、このことに早くから注目され、綿密な考証のもと「三芳野神社々殿の一考察」という論考を纒められました（「川越の文化財」第45号初出掲載）。以下、その大意を要約します。

1.寛永元年(1624)に再興、明暦２年(1656)に改造（弘化４年、大正11年屋根改造）されたのが現社殿である。

2.絵巻の社殿は本殿（流れ造）と拝殿（入母屋造）のみで幣殿は存在しない。現社殿は本殿と拝殿（ともに入母屋造）を幣殿がつないでいる。（この形式は権現造という）

3.天神縁起の絵は写実的で、新装なった社殿の誤認は考えられない。明暦の時点で改造された可能性がつよい。

4.絵巻の社殿を現状の如く改めるのは至難と思われる。寛永当初の社殿と明暦改造のものは本来別の建造物ではないか。とすると、新たな建立か既存建造物の移築か。明暦の棟札には事情示さず。

5.「明暦二年別当乗海覚書（三芳野神社什物書上）」に記載の「江戸御城内御殿 一軒」の意味するものは如何。

6.「徳川実紀(厳有院御殿実記)」に江戸城内二の丸東照宮の紅葉山への合祀に伴う「……空宮は取払ひて川越仙波へうつさる」の記載あり。

7.前記記事から仙波東照宮は二の丸東照宮の移築と久しく信じられて来たが、昭和38年刊行の仙波東照宮修理報告書でこの説は否定され、現地での造営が証明された。

8.三芳野神社の別当高松院は仙波喜多院の直末。6.の記事を仙波喜多院と解すれば乗海覚書と一致する。現存の氷川神社摂社八坂神社はもと天神外宮で、明治5年に田回輪より現在地に移築されており、二の丸東照宮拝殿であったことが既に判明している。故にその本殿が三芳野神社の本殿であるという推測も可能。

9.三芳野神社の本殿は三間社（補足：東照宮は普通山王・日光・東照の三権現を一社に配祀）で、帳前に掛けられた葵紋の紋章は二の丸伝来を物語るか。

この度の解体修理は、以上の疑問の解明に絶好の機会となる。

10.――略――

この論考が発表されたのは、平成元年度より３ヶ年に亘る大修理の直前でした。その後の修理工事に伴う諸調査は、建築学的にこの論考を裏づけ、補足することはあっても、これを否定する材料は皆無であったと言っても過言ではありません（詳細は修理工事報告書又は「三芳野神社の社宝」展図録参照）。つまり、95%以上の確率で〈三芳野神社本殿は江戸城二の丸東照宮本殿を改造、移築したもの〉であるということです。

山田先生積年のご労苦は報われるべくして報われました。ただ、かえすがえすも残念でならないのは、充分すぎる程状況証拠が揃っているのに、唯一決め手となる記録が残されていないことです。移築への経緯なり当初の社殿の行方なりを示す記録が何故失なわれたのか知る由もありませんが、この重大な謎を解く鍵は、わずかに三芳野神社自身が握っていたのです。不幸にして永く荒廃の時は流れ、損失が大きかったのも事実ですが、とにかく社殿がこうして保存され、立派に後世に託すことが出来るということは大きな喜びです。

伊勢物語の故事を引くまでもなく、古来ロマンを秘めて来た神社です。多少わからないことがあったって、むしろその方がこの神社に相応しい姿なのかも知れません。

（学芸係　鈴木 邦照）

においのタイム・カプセル
～川越城本丸跡出土の徳利について～

1．徳利は何に使われたか？

みなさん、徳利は何に使われたと思いますか？時代劇の好きな方は、凄腕の浪人が貧之徳利を逆手にお酒を飲んでいるシーンを思い浮かべるかもしれません。また、居酒屋の前には、決まって通い帳と徳利を提げたたぬきの置物がたたずんでいます。しかし、徳利は本当にお酒の容器としてだけ使われたのでしょうか？

平成５年に行われた川越城本丸跡の発掘調査では、地下室や土坑などからたくさんの徳利が出土しています。これらは弘化３年(1846)の火災で焼失した二の丸御殿で使われていたものと考えられます。出土した徳利のすべてがお酒の容器だとしたら、当時城内にいた人々はとんでもない大酒呑みだったことになります。

ここでは、川越城跡から出土した徳利を手掛かりに、お酒の容器以外の徳利の使われかたや、江戸時代の酒・油・醤油などの計り売りの習慣について考えてみたいと思います。

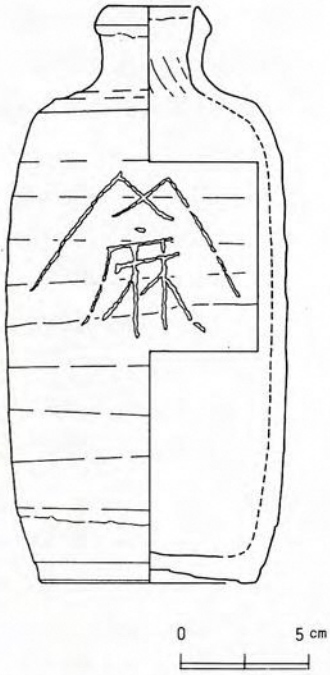
2．徳利は油の臭いがした

本丸跡から出土した徳利は、江戸時代後期から幕末にかけて瀬戸・美濃地方で焼かれた製品です。これらの中には淡緑色の灰釉を施した「高田徳利」と茶褐色の鉄釉を施した「ぺこかん徳利」とがあります。徳利の大きさは、五合(900mℓ)と二合半(450mℓ)のものが多いようです。

徳利の大半は捨てられた時に欠けてしまったり、土の重みで割れてしまったりしていましたが、中には全く壊れていない完形品で出土したものもあります。そこで完形品で出土した徳利については、中に何が入っていたのか確かめるために、すぐに博物館に持ち帰って水洗し、においをかいでみることにしました。

水洗が終わり、徳利の口に鼻を近づけてみると、むせかえるような強烈な臭いがしました。灯明油として使われた菜種油の臭いです。当時御殿内では多くの人々が暮らしており、夜の照明に使われる灯明油も多量に必要だったことでしょう。徳利と共にたくさんの灯明皿が出土したこともこれを裏付けています。

川越城本丸跡の発掘調査ではたくさんの徳利が出土しています。



「山麻」の釘書きのある油徳利

3．喜多町 綾部利右衛門商店

本丸跡から出土した徳利の多くは、二の丸御殿で使われる灯明油を入れた油徳利として利用されていたことがわかりました。ここで気になるのは、こうした城内で使われる多量の油を当時どこから買い入れていたかということです。

この手掛かりとなるのは、「山麻」の屋号が釘書きされた灰釉徳利です。一般的に、屋号が刻まれた徳利の多くは、酒屋がお酒を小口売りする時にお得意先に貸し出す「通い徳利」と考えられています。

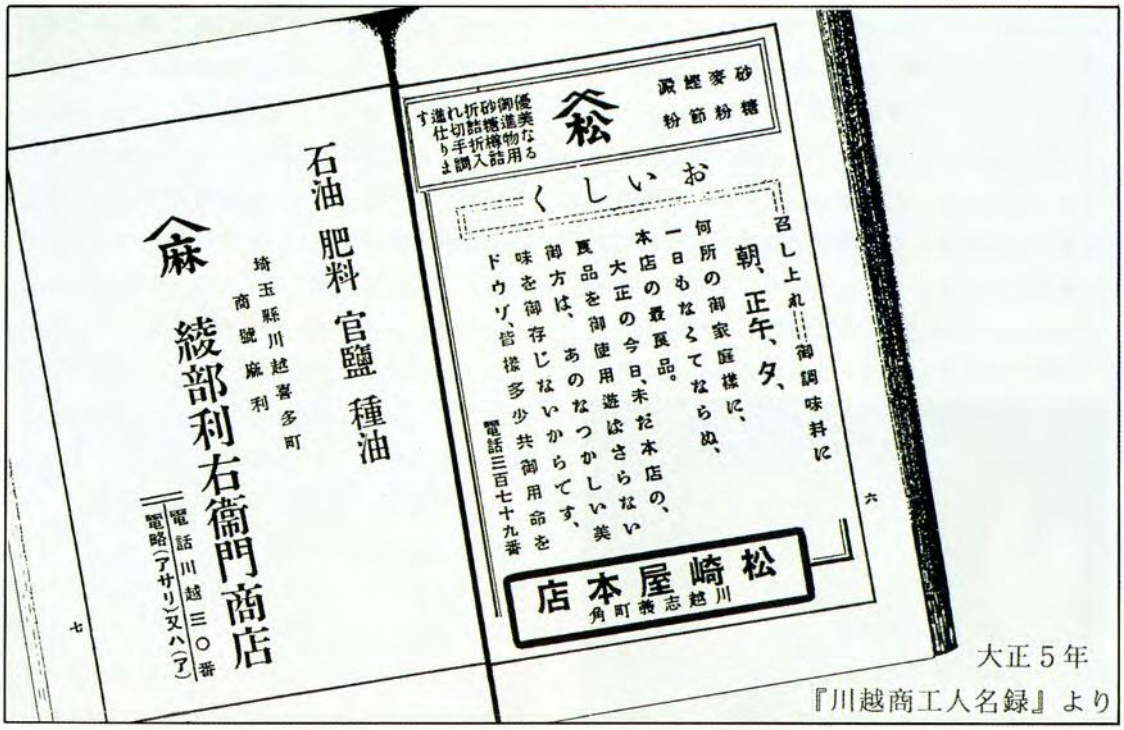
このことから、大正５年(1916)の『川越商工人名録』を調べてみると、喜多町で塩・油・肥料を商っていた綾部利右衛門商店の屋号が「山麻」であることがわかります。喜多町の綾部家は江戸時代、川越藩の御用商人として活躍しました。「山麻」釘書きをもつ徳利も綾部家が灯明油を城中に納める際に使われたのでしょう。

4．においのタイム・カプセル

「徳利」ということばを耳にした時、私たちは当然のように酒器・お酒の容器と考えてしまいます。しかし、城内から徳利が大量に出土することを不思議に思い、徳利のにおいを調べ出したことから、いろいろなことがわかってきました。二の丸御殿で使われていた徳利の多くが灯明油の小口売りの容器として城内に運び込まれていたこと。また、徳利に刻まれた「山麻」の屋号から、これらの灯明油の一部は喜多町の綾部利右衛門の店から城内に納められていたことなど、これまで知られていなかった城と町をつなぐ糸が見えてきました。

今からおよそ150年前、川越城にくらした人々の生活の一端を垣間見せてくれたこの徳利は、まさに江戸のにおいを閉じ込めたタイム・カプセルといえるでしょう。

（学芸係　岡田 賢治）



大正５年の「川越商工人名録」によれば綾部利右衛門商店の屋号が「山麻」だったことがわかります。

社会教育と博物館(6)

学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する、諸施設と協力し、その活動を援助すること。（博物館法第３条第１項より）

「もっとひもを早く回して！」「けむりがでてきたぞ。もうすこし。」「やったー！火がついたぞ！」大きな歓声と拍手。

川越市青年会議所青少年開発委員会の主催による「ふるさとわんぱく道場－古代体験教室・土器つくりと火起こしチャレンジ」のひとコマ。

まだ、残暑のきびしいなか八瀬大橋の川原で「野焼き」と「火起こし」が、川越青年会議所の方々を中心に、霞ヶ関公民館と協力しながらおこなわれました。現在の子供たちは以前とくらべてあそび場が少なくなり、テレビゲームなど創造的なあそびが少なくなっています。そこで土器づくりを通して、子供の創造性を高めるとともに、親子のふれあいやコミュニケーションを深めるのが趣旨でした。

学校週５日制の実施などが進むなか、社会教育の大切さがひときわ注目をあびているなかで、社会教育施設や機関と青年会議所という団体が協力してひとつの事業を成功させたということは大変意義深いものです。今回は、霞ヶ関地区の方々を中心にした事業でしたが、この経験は今後の社会教育施設や機関の連携の在り方を示す意義深いものであると思います。特に、青年会議所の方々の熱意に敬意を評したいと思います。

野焼きが終了し、のべ３日間の事業を終えた

土器づくりのようす

家族で火おこしにチャレンジ

あと、参加者の方々から「色々な人と知り合いになれてよかった。」「家族で参加できてよかった。」など、参加者の感想を聞くとこの事業に参加した喜びを感じました。家族で土器づくり、火起こし、野焼きに挑戦する様子が今でも鮮明に記憶されています。

《参加者の感想》

火起こし、土器づくりを広報で知ったときなぜか胸がどきどきして、ぜひチャレンジしたい気持ちになりました。初日の粘土こねも楽しかった。翌日、全身が痛くて、その時のことを主人に聞いてもらったり、あの畑の土でもできるかななどと夢が広がり、一家団欒、コミュニケーションもでき、何よりも、主人がわたしの作品にやさしい目で感心した言葉をかけてくれたり、子供の作品に目をみはったり、会話がはずみました。・・・中略・・・・・なかなかつかなかった火がやっと付いたとき全員で「やったー！」の歓声。全身で、あの時何年も感じたことのない感動を味わいました。焼き上がったときも皆と親しみが以前より増して、心より感動しているなあと心が暖かくなりました。本当に参加してよかった。青少年開発委員会の方々と指導してくださった方々にありがとうございました。

（文責　教育普及係長　水谷　薫）

展示解説について

川越市立博物館では、開館以来、ご希望のお客様に対して展示の解説を行っておりますが、ご存じだったでしょうか。おかげさまで好評を得ており、「川越を改めて認識しました」「またお願いします」とのお声を多数いただいています。そうした博物館の解説業務を中心に、お客様からの質問に対しての受け答え、館のご案内にと活躍して下さっているのが解説員の女性たちです。彼女たちはいわば博物館の「顔」ともいえる存在です。

展示解説の申し込みは、平均すると１日２、３件ですが、多い日では５件以上にもなります。その多くが団体のお客様ですが、目的、集まった人の層はそれぞれ異なりますし、博物館見学の所要時間もまちまちです。解説員はお客様に満足していただくために、それぞれの異なる条件を考慮した上で、目的に添うような解説を心がけています。解説員の毎朝のミーティングではその日の解説予定団体の連絡がありますが、皆真剣な表情で聞き入り、必要な情報をメモします。あらかじめお客様の目的、人数、所要時間を把握しておく必要があるからです。

実際、解説に対してどのようなことを心がけているのか解説員の皆さんに聞いてみました。

「様々なタイプの方がいらっしゃるので、お客様に合わせた解説をするようにと思っています。」

「川越にどのようなイメージを持っているか、何に一番興味があるのかなどお客様に伺いながら一方的な解説にならないようコミュニケーションをとりながら解説を進めていくよう努力しています。」

「笑顔、言葉遣い、姿勢、解説の内容などには常に心配りをしています。博物館の印象は、やはり直接お客様に接する私たちの印象でもあると思います。」

などの答えが返ってきました。各々が真摯な気持ちで解説に臨んでいることがお解りいただけると思います。そんな彼女たちですから、解説後、お客様から「ありがとうございました」とお礼の言葉をいただいたときが、解説をして本当によかったと一番嬉しく感じるそうです。

ときどき、お客様から、「個人でもお話を伺えるのでしょうか」「聞きたいことがあるのだが声をかけ辛い」という声を聞くことがあります。解説員は決して堅苦しい存在ではありません。気軽に声をかけて、疑問に思ったことや博物館のご感想をお聞かせください。解説員一同、お客様のご要望には誠意をもってお応えしたいと思っております。

（文責 教育普及係　山下 清美）

解説のようす　その１

解説のようす　その２

●●●ただいま準備中●●●

平成６年３月23日(水)から５月８日(日)まで、「館蔵品展＝美術資料を中心として＝」を開催いたします。今回の館蔵品展は、市立博物館が購入、寄贈を受けた美術作品60余点を前期・後期にわけて展示するものです。

絵画では小茂田青樹、岩崎勝平、勝田蕉琴ら江戸から昭和初期にかけて活躍した川越にゆかりのある画人を、また、武具類では英義(てるよし)、英辰(てるとき)ら川越にゆかりのある刀匠の作品と周防守(すおうのかみ)家に伝わる具足などを展示します。

今回、川越で活躍し、あるいは川越から世にはばたいていった作家たちの足跡に迫ってみたいと思います。

小茂田青樹　鳴鶏

利用状況

（単位：人）

	一般			団体			共通				その他		合計
月	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除	入館者合計
7月	1,888	198	405	379	0	17	1,916	54	86	1,847	164	1,693	8,647
8月	3,134	509	765	15	0	5	2,078	276	355	3,309	179	1,153	11,778
9月	2,096	309	298	683	0	16	2,459	80	115	3,088	156	2,010	11,310
10月	3,787	292	376	757	25	18	3,676	145	182	5,330	333	4,954	19,875

《利用のご案内》

■開館時間　午前９時から午後５時まで
　　ただし入館は午後４時30分まで
■休館日　月曜日（休日は除く）
　　休日の翌日（土曜日又は日曜日は除く）
　　年末年始(12月28日から１月４日まで)
　　館内整理日(毎月第４金曜日、ただし休日は除く)
■入館料　〈常設展〉
　　大人200円(160円)、学生・生徒100円(80円)
　　児童50円(40円)
　　( )は20人以上の団体料金
　　〈川越城本丸御殿、川越市蔵造り資料館との共通入館料〉
　　大人300円、学生・生徒150円、児童80円
　　特別展については別に定めます

《交通のご案内》

■ＪＲ川越線・東武東上線川越駅から東武バス札ノ辻下車徒歩８分
■西武新宿線本川越駅から東武バス札ノ辻下車徒歩８分
　　西武バス市役所前下車徒歩５分

発行日　平成６年２月15日　発行　川越市立博物館
〒350　川越市郭町２丁目30番１号
TEL　0492-22-5399